

これからも 二人三脚で山に向かう

緑が茂る庭先で、木の手入れをする一人の男性がいた。池上隆三さんだ。昭和39年から、毎日のように山に入り、林業日誌をつけ続けている。そして日誌の内容を則子さんが表にまとめ、関東農政局に提出。林業の礎となる農林水産統計情報に生

かされてきた。つづった日誌は1年で1冊、全部で50冊にもなるという。日誌には、その日の作業の内容や、木々の様子がこと細かに記録されている。ときには家の出来事、近所の出来事まで記される、池上家の歴史書だ。「お父さんが日誌をつけ、わたしが資料にまとめるんです。2人でずっと続けているわが家の夜の日課です」と則子さんは楽しげに話す。林業統計に長年貢献し、数々の受賞歴がある隆三さん。自宅にはたくさんの感謝状・表彰状が飾られている。そして今年の春、その功績が認められ、内閣総理大臣から「桜を見る会」に招待された。今年農林業関連で招待されたのは全国で6組、関東農政局管内ではただ1組だけだった。「一生に一度あるかどうかという光栄なこと。招待状を手にしたときは大変感激しました。福田元首相の手がやわらかかったことや、新宿御苑の八重桜がすばらしかったことが、今でも思い出されます。

葛飾区に住む息子もお祝いにかけつけてくれたんですよ。こんなに幸せなことはありませんでした」と隆三さんは目を細める。「お父さんは足を悪くし難儀なだけ、山に入るととたんに元気になるんです。心配だからわたしもついて行くんですが、いつも置いていかれそうになるんですよ」と則子さんが楽しげに隆三さんを見る。隆三さんは、「わたしは山が好きなんです。じつとしているとつづいてくる。そういう性格なんです。今は、昔ほど山には行けません。それでも山は自分の生きがいなんです。30年ほど前、山の中に細いヒノキがありました。直径30センチくらいのヒヨロヒヨロした木でした。そのままにしておいたら、だるうと思ひ、枝打ちをしたんです。その木が5尺もある立派なヒノキに成長しました。根元からつべんまで皮がきれ

いにむける、節もないとてもきれいな木でした。手入れの仕方の差で、将来全然違った木に成長するところが林業のおもしろさだと思います。ほんのちよつとの世話の違いで、どんな木になるかわわつてくるんですよ」。何十年と山に入り木を世話し続けた隆三さんだから分かることだろう。池上さんの山のヒノキが、6年ほど前に実施された、京都西本願寺の修復工事に使われたそうだ。隆三さんの仕事はどれほどいいかいかがうかがえる話だ。則子さんにとって、隆三さんは自慢の旦那さん。「お父さんは無口で静かな人だけど、一本心が通った人。そんなお父さんだから、2人で持ちつもたれつ、力を合わせてこれまでやってこれたんだと思います」。

隆三さんは林業についてこう話す。「収穫の時期が決まっていらない点が農業と違う点。長い年月がかかるし、放っておくこともできる。木が売れない今、山から多くの人が遠ざかっていったが、このまま山が荒れてしまうのは忍びない。みんなに山の大切さを思い出してほしい」。そう言いながら、隆三さんの趣味の「庭木」の名前や性質などを、一本一本丁寧に教えてくれた。それらを見つめる目はとてもやさしげで、植物を愛する気持ちがひしひしと伝わってきた。則子さんは言う。「2人そろって朝を迎えることができるのが一番の幸せ。当たり前のように当たり前ではないんです」と、やさしい瞳で隆三さんを見つめる。「言い合いですることもしょっちゅうなんですけどね」と笑っていた。2人は今日も手を取り合いながら山に入っていく。



毎日欠かさず記録してある林業日誌。林業経営統計調査資料として活用された

長年にわたり林業統計に貢献
その功績が認められ、
内閣総理大臣から「桜を見る会」に招待された

池上隆三さん・則子さん

Ikegami Ryuzou・Noriko (平栗)